

浄 土

10
the JODO
1993
10月号

今月の随想

原田純一 大角 修 塩田隆明

北海道じゃがいも譚 夏 攸吾

念仏の系譜④ 須藤隆仙

TVキャスターのアンクル③ 利根川 裕

ローラ、助けて

山折哲雄



法然上人鑽仰会発行

心行きかう道標。



優しい気持ちに戻って、
大切な人と
話したい時間がある。
人と人との思いやり、
心をこめてかわす会話。
毎日の暮らしの中の道標。
0088はあなたにとって
そんな存在になりたいと
考えています。

ますますおトクになりました。

0088はご加入にかかる費用も、基本料金も無料です。

お申し込み・お問い合わせは、日本テレコムお客様センターへ

フリー
コール  **0088-82(無料)**

または

 **0120-0088-82(無料)**

● 受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

日本を楽しくする電話

0088

函館を歩く (二)

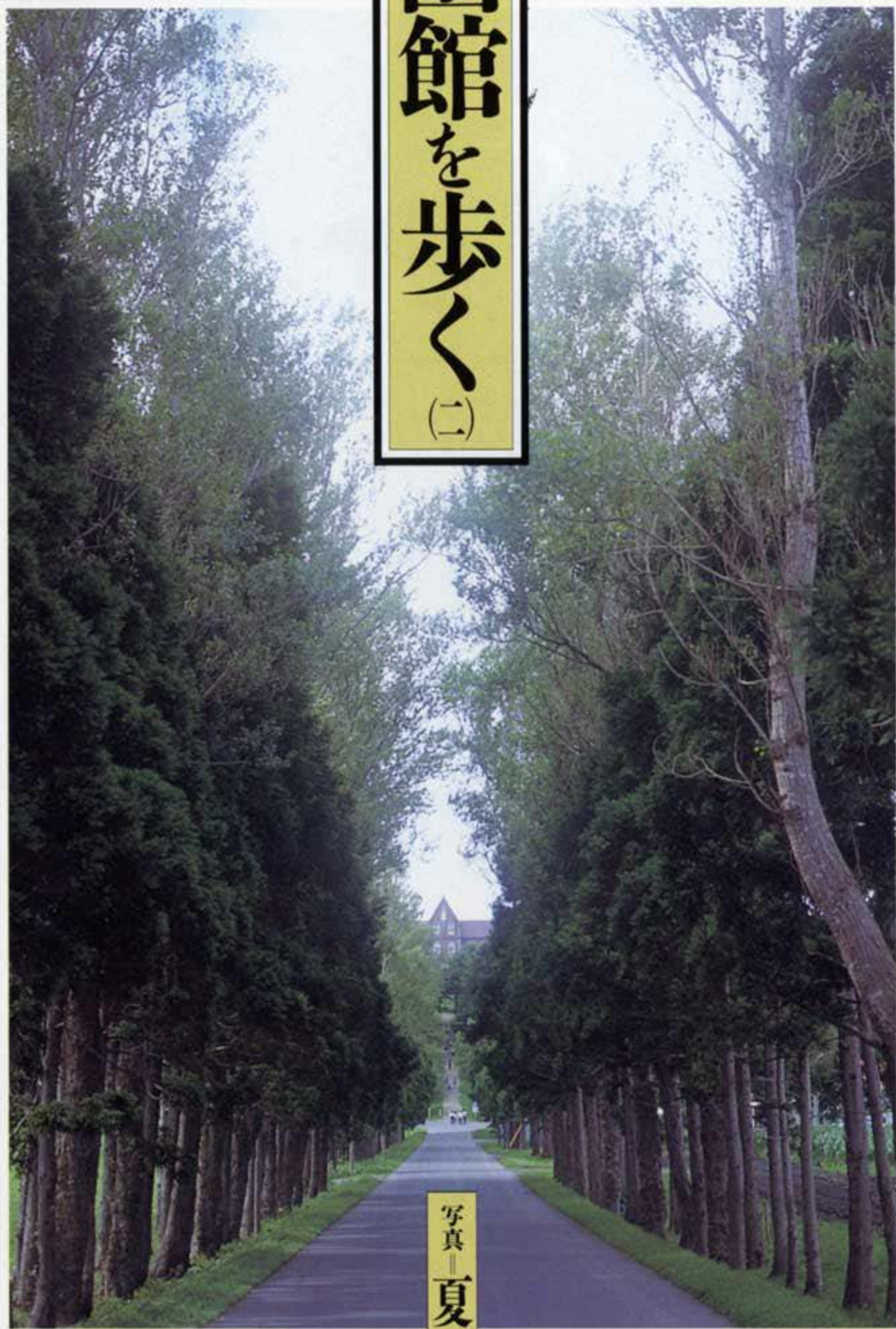


写真 夏 攸吾

トラピスト修道院へ向かうポプラ並木



函館市桔梗町のじゃがいも畑

種いも作りに賭ける男がいる

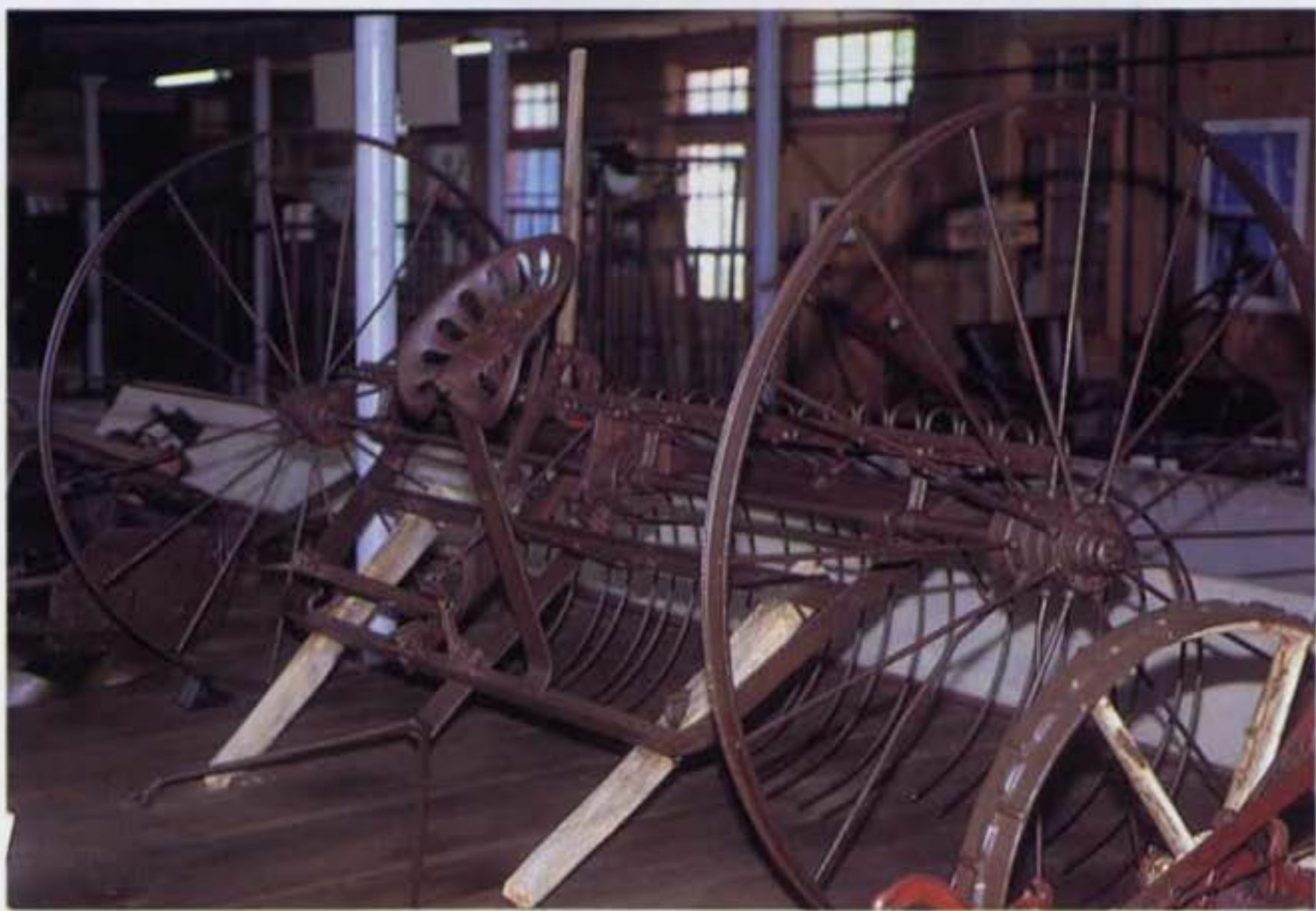




大農法で収穫される男爵芋



厚沢部メークインの収穫



男爵資料館のヘイレーキ

浄土

1993/10月号

目次

函館を歩く(二)——㊦㊧……写真＝夏 攸吾 3

今月の随想

キーストンの死……………原田純一 8

自然に還る死……………大角 修 12

死を考える……………塩田隆明 16

北海道じゃがいも譚^{ばなし}……………文と写真＝夏 攸吾 21

念仏信仰の系譜——㊨……………須藤隆仙 29

テレビキャスターのアングル——㊩

乱れている日本語……………利根川 裕 35

㊪㊫㊬㊭

ローラ助けて……………山折哲雄 40

編集後記……………48

表紙撮影＝落合泰三

キーストンの死



原田純一

それは異様な光景だった。冷たいコンクリートの上に投げ出されたように横たわっている馬体を十人ほどが取り囲み、見下ろしていた。スタンドの記者席からかなり離れた競走馬診療所に息急き切って駆け付けた私は、いつものように無遠慮に質問をぶつけようとしたが、男たち

のあまりにも沈痛な表情に口ごもってその場に立ち尽くした。

二、三分も過ぎたのだろうか、白衣の獣医が聴診器を馬体に当ててから「やっと止まった。本当に心臓が強かったんだなあ」と呟いた。

昭和四十二年十二月十七日、ダービー馬であ

ったキーストンに安楽死の処分が取られた。

その二年前のダービーで宿敵のダイコーターを破って逃げ切ったキーストンは、六歳の秋、四連勝の絶好調で阪神大賞典という三千百メートルのレースに出走してきたのだ。山本騎手とのコンビでいつものように快調に逃げて、ゴールまであと三百メートルの地点に来た時、キーストンはまるで崩れるように前のめりに倒れたのである。後続馬がその横を走り抜けた後、立ち上がったキーストンの左前脚は折れた箇所からブラブラと宙に舞い、彼の意味とは別の動きをしていた。と、三本脚のキーストンはゆっくりと歩き始め、倒れた山本騎手を鼻先で揺り動かすような仕草を見せたのである。スタンド前でこのシーンは感動的と、スポーツ紙に書かれたが、実は入社四年目で若かった運動部記者の私は、同馬の最期の瞬間まで記事に書き込ん

でデスクの請けを良くしようという、今思えばさもしい気持ちで診療所へと走ったのであった。現在は麻酔薬と筋肉弛緩剤を使うが、当時 Strokinone（筋肉弛緩剤の一種）で薬殺して、死体は食肉業者が引き取っていた。

賭け事が好きで、競馬を担当すれば情報が入り、馬券が当たるのではないかという不純な動機で志願した競馬記者の私であったが、さっきまで歓声の中にいたキーストンの死の瞬間を目の当たりにしたのと、処理の事実を知った時、それまで賭けの手段としてサイコロと同じぐらいにしか感じていなかった競走馬たちの、過酷な運命に対する悲しい叫びを聞いたような気がした。

いささかおおげさな言い方であるが、それまで死についてなど考えても見なかったけれど、たったいま波打っていたキーストンの胸が静か

に止まった時、生きとし生けるものが迎える死とはこれであつたのかという実感を覚えている。

あれから二十五年以上も競馬に携わつて来て、数多くの競走馬の事故と死を見てきた。しかし、そのいずれも人間の意思に関わつた死である。

競馬サークルでは、競走馬を「経済動物」という言葉に置き換えることがある。特にサラブレッドは数千万円、時には億の単位で取り引きされるほど高価だ。そのサラブレッドはレースで好成績を上げることによつて賞金を得、経済的效果をもたらす。だからガラス細工にも似た脚を痛めるなどして好成績を上げられないか、スピードの能力に欠ける馬は、人間の手によつて淘汰されることになる。なにしろ一頭につき一カ月、約五十万円以上の経費がかかるのだから、無駄メシを食わしておくわけにはいかない。ということ、経済動物というどこか寒々とし

た言葉が使われることになる。

人間の死に方には病死、事故死、自殺、老衰によるいわば自然死もあるし、それはさまざまだ。だが、競走馬の場合は、そのほとんどは「殺される」という形で最期を迎える。

もちろん中には愛馬心のある馬主によつて現役引退後も余生を送れる競走馬がいないわけではない。

余談だが、皐月賞、ダービー、菊花賞の三冠を勝つて名馬といわれたシンザンは、今年三十二歳でサラブレッドの寿命といわれる三十歳を上回っている。あと数年で老衰という最期を迎えるのだろうか、これは競馬の社会においては稀有なことである。

とはいつても競走馬が脚部に酷い骨折をした場合、残つた脚に全体重がかかり必ず蹄葉炎（蹄が腐る病気）におかされて、苦しみながら死を

迎えなければならなくなる。

その苦痛を早く取り除いてやるための安楽死は必ずしも冷酷なことではないし、むしろホースマンにとっては愛馬心である場合がある。そこで近頃、こんなことを考えてしまうのである。果たしてこういうケースを人間に当てはめたら、どのような評価を受けるのであろうか……と。

実は私には交通事故で意識不明のまま六年間、寝たきりの八十六歳になる父親がいる。現在の医療制度では仕方がないのか、病院をタライ回しにされ、心理的、経済的な不安は相当なものだ。年齢と病状からみてもとても社会復帰があるわけではないし、生きている姿を見るのさえ辛いくらいである。

有り体に白状するなら、最近アメリカのキボキアン博士という医師が、病気で重篤な老人の安楽死の自殺幫助で問題になったという記事を

読んで、罪深くも私の父親にも安楽死の措置が取れるとしたら、自分はこういう選択をするのだろうかと考えた。同情してくれる人は「気持ちわかるよ」といつてくれた。だが私の考えはやはり正しくないようだ。

毎日のように病院へ足を運ぶ八十歳の母の生きる支えに、父は立派になっているのであるからである。

人間には決して無駄な生命はないのではない。いや、私は動物たちにこそ生へのひたむきな希求の貴さを学ぶべきであつたようだ。

だから私は自殺を認める気持ちにはなれない。残された人生は死よりどう生きるかを考えるべきと思うのだが……。二十五年前、驚異的な心臓の強さで一秒でも生きようとしたあのダービー馬キーストンは、だから私には忘れられない愛しい馬なのである。

(競馬評論家)

自然に還る死



大角 修

私は土葬主義者である。臓器移植などで役に立つ部品があるのであれば利用してもらってしまわないが、残りはどこかの山の麓に埋めてほしいと願っている。

これには私の少年時代の記憶が影響している。私は兵庫県南部の夢前町ゆめさきというところで育った。

町といっても、山の村である。そこでは以前、皆、土葬だった。

墓は一族ごとに山の麓にあった。人が死ぬと、行列を作って遺体を運び、墓場に埋める。いわゆる野辺の送りというやつだ。

墓地には棺桶がすっぽり入る大きさに穴が掘

られており、穴の底に棺を置いて、土をかぶせる。最初は、子や孫など、故人と血のつながりの濃い者が一握りの土を入れる。私もじいさんが死んだ時に、土を入れた。小学六年生の夏休みのことだった。土のかたまりをポコンと放り込んだ時の感触が、今でも残っている。

その後は皆でドサドサと土をかぶせ、土まじゅう状に盛り上げた上に木の墓標を立てておく。そうして一年ほどすると、棺が腐り、ドサツという感じで落ちこんだであろう凹みができる。それを埋め戻した後に小高く石段を築き、石の本墓ほんぼかを建てて一周忌の法要をするというのが故郷の流儀だった。

こういうやりかただから、墓は一人ひとりの個人墓である。といって墓地がそう広いわけではないから、古い墓石はどかされ、脇に積まれていたりした。そんな墓石には文明とか慶応と

か、江戸時代の年号がかすれが見え、なんととはなしにご先祖のことを思ったりした。

そうした遠い昔の死者はともかく、そこらあたりに建っている墓石の主については、大人たちが皆知っていた。お彼岸やお盆の墓参りでは、一つひとつ、これはどういう人だと解説しながら、花や線香を供えていったものだった。なかには川原の石を拾ってきただけの墓石もあり、幼く死んだ子の墓だということだった。

全体に墓場は、陰気さと陽気さが混ざりあったような場所だった。墓地は森の中でじつとりと湿り、どこかしら幽気ただよう雰囲気だったが、絶望的な暗さというのではないのどかさがあった。

だいたい、墓参りをするのは、お盆などで親戚一同が集まる時。いわばハレの日だった。それに死を楽天的に考えるふうでもあった。わが

一族の墓地には大きなユズの木があり、墓参りのついでに実をもぎってきて食べる。墓場のユズだからといって気にする者はいない。墓場だから養分がゆきとどいていると、毎年決まった冗談を誰かが言ったものだった。

このように死が楽天的だったのは、死が自然な現象として受け止められていたからだと思う。私には、土まんじゅうが凹んで開いた穴が、なんといつても印象的だった。いつのまにか遺体が土に還ってなくなり、周りに草を生やしている。その後、築かれた石段の隙間にも蟻がチリチリと列を作って入りこんでいたり、あるいは、草や木の養分になったであろうと思われたりして、死者が自然に還ったことが実感できたのである。

胞子袋を伸ばした苔の茎も、樹間の木洩れ日に白く光る落ち葉も、あらゆるものが生と死の循環の中にあることを無言のうちに感じさせて

くれた。

しかし、わが一族の先祖伝来の墓地は、今はもうない。数年前に霊園に移され、例によって「〇〇家之墓」という一基の墓石で代表されることになったのである。

その間には、チグハグな移行過程もあった。私の故郷で土葬が廃止されたのは、じいさんが死んだ頃。じいさんは、いわば土葬最後の世代だった。その後、大学三年の頃にはあさんが死んだが、保健所の指導とかで土葬が許されず、火葬にされた。その遺骨はじいさんの墓に入れられたのだが、果たしてじいさんは焼かれたばあさんの骨を迎えて、なんと思っただろうか。喜ばしいとでも思っただろうか。

そういえば、そのころから一人ひとりの個人墓ではなく夫婦墓になった。つれあいに先立たれた時、自分の名も墓に刻んでおく。生きてい

るうちは赤い字にして、自分も墓に入ったら黒く塗りなおされるのである。

このごろ、死の準備教育などということが言われるが、すでに刻まれた自分の墓銘ほど、来たるべき死を予感させるものはないだろう。もし夫婦仲が悪ければ悲劇というほかはないけれど、昔の人は概して運命に従順だったように思う。私の祖母も死んだらここに入るんだと、じいさんの墓を眺めながら十年ほど過ごした。

今では夫と同じ墓に入るなんて絶対イヤという女性が増えていると報道されているが、いかがなものだろう。運命に従順であればいいというものではないだろうが、人の力のおよばないことがある。夫あるいは妻とともに眠りたいと思えるような人生をつくることが幸せというものではないだろうか。

ところで、私がもし土葬されるのであれば、

あるいは土葬できなくて火葬にされた場合でも、花が咲く木を一本、添えてもらえないだろうか」と望んでいる。

「花の下にて春死なむ」と歌に予言して、そのとおりには他界した西行法師をまねるわけではない。あのような死にかたは、とうてい凡人のできることではない。ただ、知恩院蔵の「二十五菩薩来迎図」に描かれている山はだの花に心ひかれるものがある。

あの絵は阿弥陀仏が人をまさに浄土に迎えようとするところ。仏自ら山を越えて来るところである。その山はだに、桜であろうと思われる花が群れ咲いている。阿弥陀仏の極楽浄土はあまりに壮大なイメージだから、私にはよくわからない。むしろ、仏のまわりにさりげなく描かれている桜の花に、死後の世界の安らぎが感じられるのである。

(編集者)

死を考える



塩田隆明

死を驚き、恐れる気持は古代より人間が持ち続けてきた共通の感情であろう。死についての最大の問題は、それが他人だけのものではなく、自分自身のものであるということである。また死んで生き返ってきた者は誰もいないから、「不可知なものである」ということである。「人間は死後どうなるのか」。この問題は古代の未開社会から現代の文明社会に至るまで世界の至る所で問われ、考察され続けてきた。すなわち、人間は死について無関心ではありえないのである。しかし、この死という問題は、出口のない問題

でもある。なぜならばすべての人間は死ななければならぬ。この事実に対して人間は昔から意図的な努力をさまざまな形で行なってきた。不死の追求である。太古の昔より人間は不死を願望してきた。たとえば、古代エジプトやペルシアのインカの王達は、ミイラとしてその死体を保存することにより不死を得ようとした。また中国では、仙術によって死を免れようと望み、神仙の秘薬を探し求めたり、種々なる秘儀・儀式を行なったりしている。しかし、いかなる王や皇帝、さらには日本の大大名等の強大な力を

もってしても、人間が不死を手に入れたことは一度たりともなかった。もちろん現代の最先端の科学・医学技術をもってしても。「神々のみが不死であり、人間は必ず死ぬ」という真理は、すでに古代のインドやギリシャの哲学者達も認めないわけにはいかなかったのである。しかし、出口がない一方において、この問題は人間が人間的な存在を超えた存在、いうならば「神的」「靈的」とでもいうべき存在を感じることを学ぶ絶好のテーマでもあったのである。さらに、それは宗教の問題とも深く結びつく。もちろん「死の後には何も残らない」という考えも古くからあるにはあった。一例を挙げると、インドでは紀元前六世紀頃にローカーヤタと呼ばれる思想家の一派があった。この派の主張するところは、地水火風の四元素のみを實在と認め、人間の精神活動や生命そのものでさえもこの四つの元素の結合にすぎないとする唯物論である。

したがって、人間の死も「この四元素が別の状態になる」というだけで、後には何も残らないという考えであつた。このような考えは西洋においててもまた、ギリシャにおいてもよく似たものが見られる。が、一般的に見て「人間が死後も何らかの形で存在する」という考え方は、普遍的な考え方である。それは、この世界の文明が存在した場所において、あらゆる民族・宗教が、死者に対するさまざまな儀礼・習俗を保持していることから知られる。身近なところの例を一つ挙げると、我々は人の死に際して「冥福を祈る」という言葉をしばしば用いる。この「冥福」とはいうまでもなく「死者の幸福」のことであり、祈りの対象は神仏に対してである。「人間は必ず死ぬ」という真理を前に、人間はどのような考察を持ちえたのか。「死に関する思念が、人間の視野を広くしたことも事実であろう。目に見えるものの他に目に

見えないものについて考え、限られた生涯を超えてはるかに広がる時間を認め、人間的な存在以上に霊的な存在を感じることを学ぶ」（渡辺照宏『死後の世界』）機会を持つことができたことは大きな事実であろう。すなわち、現世的なもの、肉体的なもの、有限なものに対して、見ることのできないもの、永遠なるもの、そして神적・霊的なものの発見である。宗教はその最大のものとしてさまざまな方向を人間に与えた（ただし、誤解のないように断っておくと、宗教、特に仏教では死以上に「生」を問題として扱っている）。「人間は死後どうなるのか」という問題について現代の科学的な立場に立てば、我々は何ら確実なことを知らない。しかし死を恐れ、不死を願望した人間の心の長い歴史の中で、辿り至った神적・霊的なものの発見の中から、人間は死をどのように考えたかということは考察できる。そもそも「人間は死後どうなるか」という問

題の一つ前のテーマとして、「なぜ人間に死があるのか」という命題が解決されなければならない。そして、ここに「その原因は罪である」という一つの解答がある。今ここでは聖書の言葉すべてを拾う紙数はないが、たとえば「ローマ人への手紙」「ヨハネの福音書」「ルカの福音書」「黙示録」等や、キリスト教信仰を簡潔に表明した「ニケア信経」「使徒信経」の中に説かれる死生観とでもいうべきものを要約してみよう。それは「人間は死ぬべき存在であり、それは罪のためである。そして人間の死の後に審判があり、神に認められた一部のものには永遠の生命が与えられる」ということになる。このような考え方の賛否はともかく、これが死の恐怖に対して長い間、人間の魂を救ってきたことは事実である。一方、まったく異なった立場を取った宗教もある。最近私は何年かぶりて釈尊の最後の旅を記した経典「遊行経」を読む機

会を得た。その中で、臨終の言葉ともいふべき真に最後の説法がなされている次の一節がある。

さあ、修業僧たちよ、お前たちに告げよう

「もろもろの事象は過ぎ去るものである。

怠ることなく修業を完成なさい」と。

(中村元 訳)

これが本当に釈尊の臨終の言葉であるならば、この中に説かれた二つの教えこそが仏教の本質の要訣であるといえよう。すなわち「無常を悟ること」「怠ることなかれ」ということである。ここには「死」は直接的には出てこない。ただ「無常を悟れ」と教え示されているのみである。元来、釈尊の最も基本的な立場に立てば、人間の死後のことは誰が決めるのでもなく、「その人間の生前の行為のみが決める」ことである。他人は元より、神々でさえも「それ」に参与することはできないとする立場である。そして、その死そのものは、無常を悟った時に解決され

る問題である、というのである。もう一つの「怠ることなかれ」とはどういうことか。「阿含經」の經典群の中でも最古のものとされている經典の一つに「法句經」というお經がある。その中に、あらゆる時代の仏教徒に愛誦された「七仏通誡偈」と呼ばれている一偈がみられる。非常によく知られている詩なのでご存知の方も多いと思われるが、ここに書き出してみよう。

ありとある 悪をば なさず

善なるを 行ない そなえ

みづからの ころを 淨む

これぞ実に もろもろの 仏のおしえ

(三枝充恵 訳)

我々は子供の頃、両親や学校の先生から「悪いことをしてはいけません。善いことをしなさい」と教えられ躰けられてきた。なぜ善いことを行ない、悪いことをしてはいけないのか。悪いことをすれば警察に捕まってしまうから、社

会生活の中ではこれも一つの真理であろう。しかし悪行をしてはならないとする根源的な答えは、「それを行なうことにより自身の心が汚れる」からである。なぜ善行をするのか。「それを行なうことにより自身の心が浄化される」からである。「自浄其意」、自らの魂を浄めるにはこれしかないのである。「怠るなかれ」の教えの対象は、正にこの自浄其意にあるといつてよいであろう。要するに、最初期の仏教の教理に従えば、「無常を悟り」、「怠ることなく修業を完成」させれば、死も死後の存在のこともまったく問題ではなくなるのである。けれども残された人間にとって、このことがいかに至難なことであるかは、その後の仏教の歴史をふり返れば瞭然である。日本の仏教に限ってみても、これを「いと易き道」と言い切った道元などは、例外中の例外といわなければならぬ。が、一方でこの至難な道に呻吟を重ねた人々が、自らの宗教体験を

踏まえて開花させたものが、鎌倉仏教である。

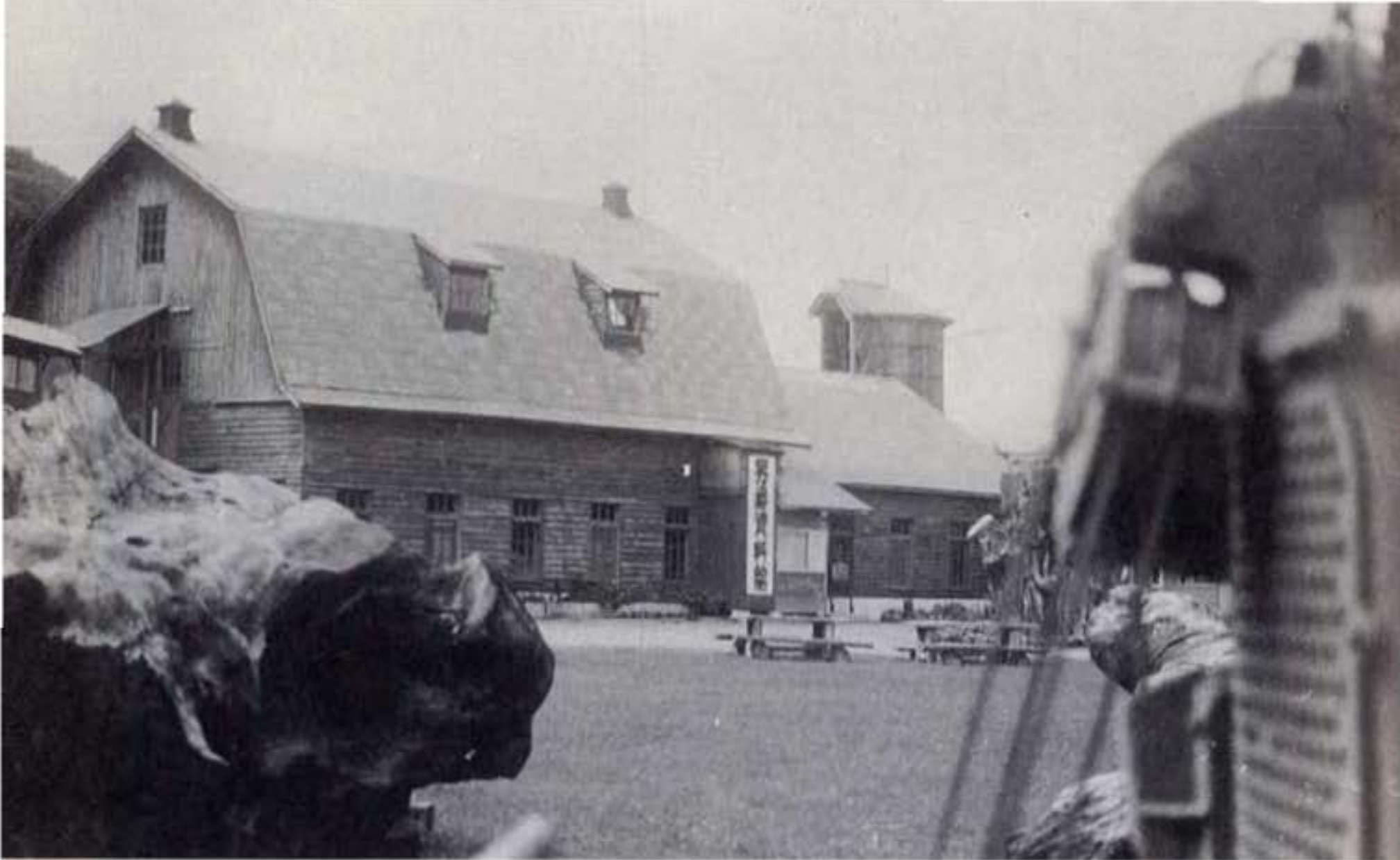
「死とは何か」。死とは「生・老・病・死」の四苦の一つである（「転法輪経」）。これによれば、我々人間にとって「生まれてくる、そのことがすでに苦」であり、「老い、病んで、死んでいく」こともまた苦なのである。いいかえれば「人間存在」のすべてが苦であるということだ。何故か。先の「法句経」の中に、

一切の行は無常である

一切の行は苦である

という句がみられる。ここていう「行」（サンスカーラ）とは、「つくられたもの」「有為なもの」と解するのが正しいと思う。すなわち、死は人間存在における無常の体现である。「無常なるものは苦である」とする釈尊の言葉に従えば、「死は苦」なのである。釈尊は、この苦からの超克とその方法を説かれたのである。

（真言宗豊山派・明王院副住職）



上磯町当別の男爵資料館

北海道じゃがいも譚

ばなし

文と写真—夏 攸吾

芋も美しくなきゃイケナイ?

前回は海、昆布のはなしだったから、今回は畑、「おじゃが」のはなしをしよう……。

舞台はやはり北海道、道南。あのゾクツとするほど長大な海底トンネルを潜る津軽海峡線に、渡島当別という小駅——正確には江差線に属する——がある。しかし、たとえば東京から、人気の寝台特急「北斗星」にゆられて来た旅人にとつては、通過駅のひとつにすぎないし。普通列車の乗客でも、そろそろ函館に近づいてそわそわしはじめるころだから、この駅のすぐ山側に「男爵資料館」があることに気づく人は少ない。なにしろ反対側の車窓には、もう函館山が見えている……。



もうひとつ当別には、バターやクッキーでおなじみのトラピスト男子修道院があり、スツクと天を衝くポプラ並木は隠れた名所だが、それとて湯の川のトラピストスチヌ女子修道院に比べれば、ずっと地味な存在である。

男爵資料館に入る前に、日本のじやがいも栽培小史。まず、ジャワのジャカルタから長崎へオランダ船によってもたらされ、ジャガタライモが語源になったこ

とはご承知のとおり。十六世紀末、慶長年間のことという。最初はその珍しさから観賞用に植えられ、のちに今年みtainな凶作に備える救荒作物としての真価が認められる。低温でよく育ち、短期間で多収穫をあげられることから、北日本で広く栽培されるようになると、「馬鈴薯」の名が生まれた。馬の首でシャンシャンと鳴る一連の鈴の形に通わせたわけで、馬轡ばそうに助けられることの多かった時代の、愛着あふれるいいネーミングだ。

ともあれ、栽培が本格化したのは明治から大正にかけて、外国から優良種が導入されてから。現在も日本のじやがいもを代表する品種「男爵」は、函館ドックを再建した男爵、川田龍吉が明治四十年ころにアメリカから原種を持ち帰ったも

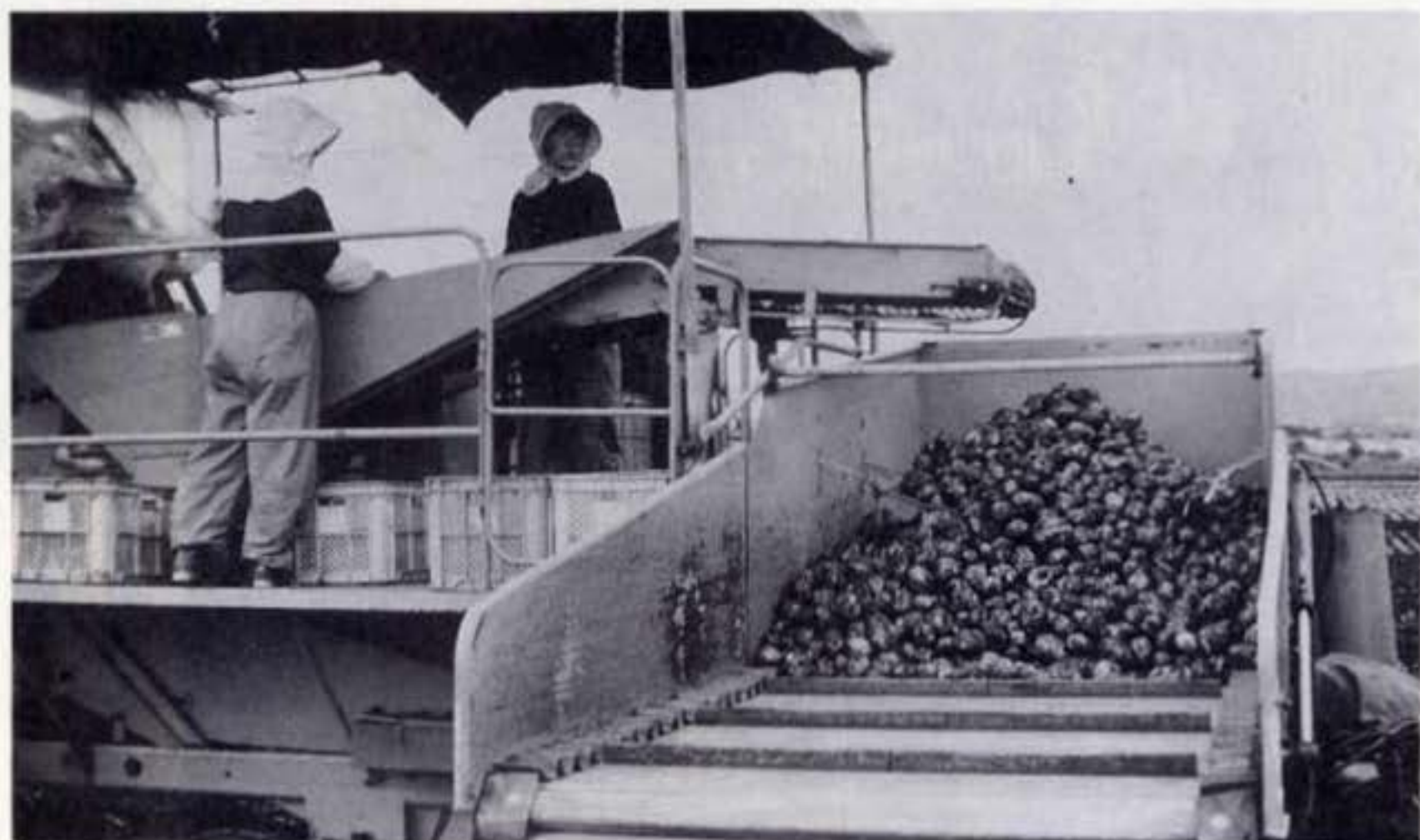
の。ここ当別にあつた自ら所有する農場で栽培したところ、北海道の風土に適し



じゃがいも料理のレスト
ラン龍杉創

ていることが明らかになり、一気に広まって、主産地となるに至つたわけである。のちに手放された川田農場を、惜しむ人があつて買い取り「男爵資料館」とした。主展示室は酪農風景に特有のマンサード屋根の牛舎、付属する木と煉瓦造りの古いサイロ。保管された農耕機具類、備品、家具、遺品の数はかなりのもので、民営のせいか整理がうまくない。展示のしかたも稚拙だが、当時の英明な先覚者らしい傑出した経営や暮らしぶりは手にとるようにわかる。ヘイレーキという干し草を集める機械など見れば、映画、たとえば『風と共に去りぬ』の一場面が目に見え、男爵が日本で最初に輸入して乗つたという蒸気自動車「ロコモビル」にしても、その人をよく偲ばせてくれる。

このあと、美醜の選別をされる



敷地内、じやがいも料理のレストランでビールかワイン。イケるんだな、これが。前庭には男爵芋のいいのを宅配してくれる好青年の店もあり、注文したついでに収穫の見られそうな畑を教えてください。

へえ…と思われるかもしれないが、偶然でなしに、作物の収穫現場を押さえることは案外難しいのである。

翌朝、見せてもらったのは、五稜郭ごりようかくの北、函館市桔梗町の北山さんの畑。機械で掘る大農法、この機械がすごい。耕耘機みたいに走りながら芋を掘り起こし、土を篩ふるい落とし、ベルトコンベアで車上に送って簡単な選別までこなせる。実にあっけなく無頓着で、それでいてほとんど芋に痛みがないのは、きつと上手な植



都会的な？厚沢部町郷土資料館

え付けの技によるのであろう。

それよりびっくりしたのは、芋の美醜
を選び分ける、ということだった。S・
M・Lのクラス別のほかに、ミスコンミ
たいな基準が加味されるというのだ。

こんなのは、市場にだせないからナ。

北山さんの放つてよこした芋は確かに、
まあ見てくれのあまりよくない不器量で
はあったが、ずんぐりごついのが男爵じ
やないか。

だってサ、まあるくて綺麗なのしか、消
費者は買ってくれないんだから……。

そうかそうか、まつつぐなキュウリや、
てかてかのリングゴとおなじであつたか。
それにしても馬鹿だねエ、私ら消費者。生
産出荷に手間がかかれば、価格も高くな
るのはあたりまえ。自分たちから、わざわざ

ざ値を釣り上げることはなかりうに……。

食べたらちつともかわらんけど、皮
むきにいくいと、ネ。メイクインだ
ってそうだ、丸細くて別嬪^{べっぴん}じゃない
とダメなんだもの、芋もたいへんな
んだワ。

厚^{あつ}沢^さ部の種芋畑で

さらにその明くる日、厚沢部へでかけ
た。函館から、大野まわりで江差にいた
る国道227号を町の中心まで約六十キ
ロの、そこはメイクイン発祥の地である。
大正十四年に初めて試作され、以後、改
良と増殖を重ねて今日の銘柄を確立した
という。

前もって郷土資料館の人に問い合わせ
ると、町境の中山峠を越えると峠下に商



店があるから、「そこで尋ねてごらんなさい」と言う。主人が地区の世話役だから、よく知っている……と。厚沢部は農業の町、観光的にはほとんど知られていない、だから外部との応対にもなれていない、そんな素朴さ実直さがポツポツと伝わってくる電話であつた。

そうして実際そのとおりにことは運んで、私は「こんな町もわるくないな……」と想う。

鎌田さんのメイクイン畑、ここでは機械で掘り、手で収穫する。ふと、想いだすことがあつた。「取材は実践」の私は^{あたし}以前、シーズン初め走りのじやがいも、皮がまだ薄いのでいまでもそうする手掘りの、収穫を手伝ったことがある。ほっくり、ころころ、顔をだす新じやがは、

手にはんのりと土の温もりを伝え、指でこするとツルンとむけて、生で食えた。いたく感動した覚えがある。

いかにも育ちのよい姿かたちのメイクイン、「だけど、小さいな……」と想う。それと察して鎌田さんが教えてくれる。

小ぶりでしょ、これは種芋だからネ、来年の作付け用の。

そうだ、芋は種芋からだつた。種芋作りはそれ専門と決まっている、という。

「食用も一緒にやればマチガイのモトだから」である。全国から買い注文が多い厚沢部のメイクイン種芋。鎌田さんはその信頼に応える人だつた。作り上手なのである。別れ際、「ここの芋がいいのはネ、連作をしないから。こんどは六月ころの、花を見にきなさいヨ」と言つて、収

農業を支えるのはやはり
人の手



穫したばかりの種芋を土産にくださる。

メークインの花は薄紅。私は、わが家の庭に少し植えてみようかと想う……。

帰路は、江差から松前をまわった。江差の沖には、先の北海道南西沖地震で甚大な被害に見舞われた奥尻島が浮かぶ、しかし、私には復興を祈るほかに手だてがない。

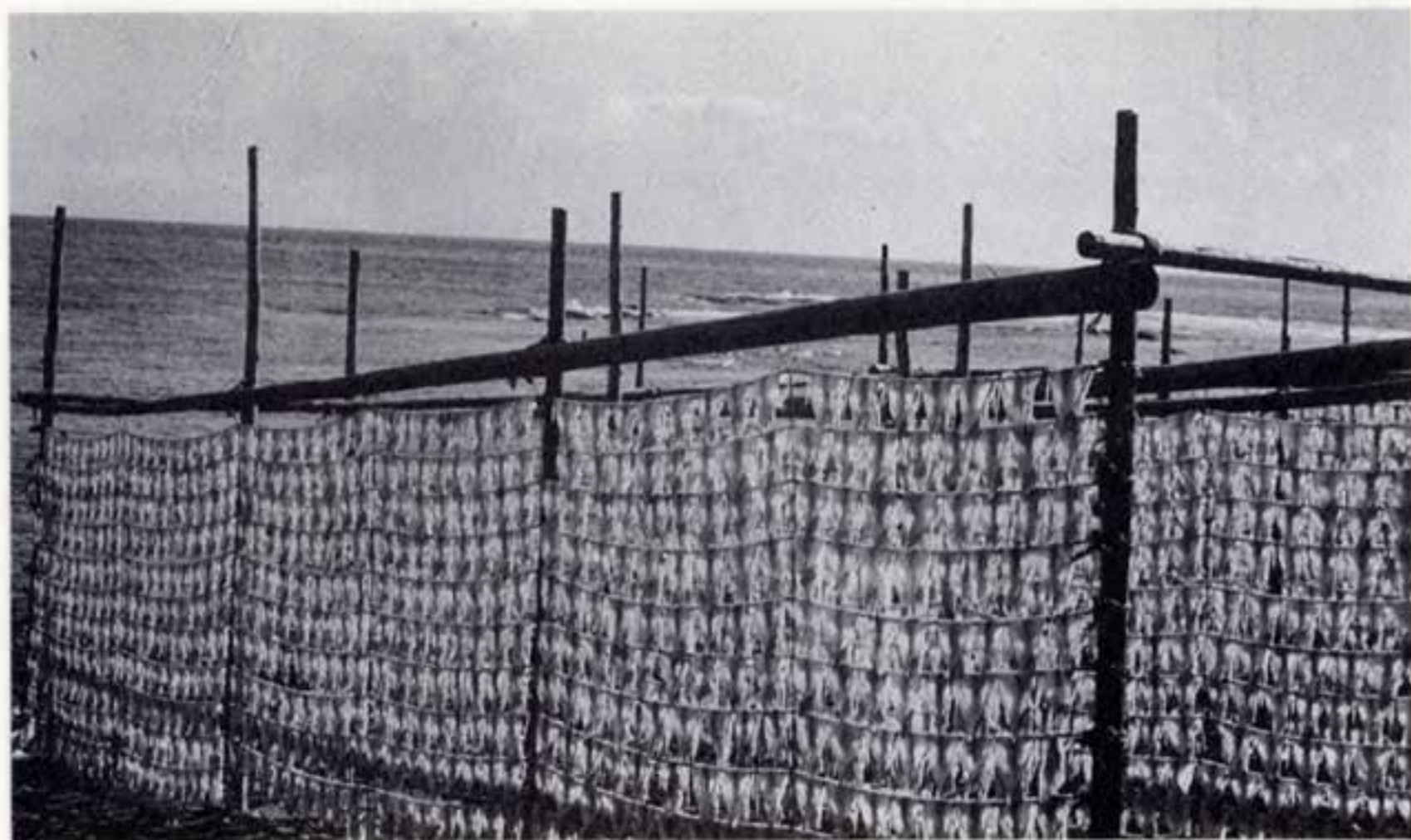
地震の傷痕は残るものの、江差の町は明かるい。江差追分の人気のせいもあるが、鉄道（江差線）の存続も大きい気がする。

一方、エゾヤマザクラの名所、松前の方はすっかり精彩がなくなった。むかしは浜を賑わしたスルメ干し、「いか襖」の風景もいまはもうほとんど見られない。鉄道がなくなったせいかもしれない気がする。



廃止になった松前線のデ
イゼルカー、海峡線（中
央）と江差線（右）

松前海岸のイカ棚、こん
な風景はもう見られない



する。

冒頭で述べた海峡線は一部、廃止され
た松前線のあとを走る。木古内駅きこないのすぐ
西方、海岐線と江差線の分岐点に立って、
私は感慨深い。かつてはトンネル工事景
気で沸いた福島町、カミさんの故郷もい
まは寂れるばかりだ。車社会になっても、
精神的支柱バックボーンはやはりレール。かつてあつ
た軌道や駅が消え、雑草に埋もれる寂寥
感さみは顫えるほどさぶい……。

「おじやが」のはなしに戻そう。私はそ
のあと函館の、朝市を、自由市場を、中
島販売を、五稜郭の本町市場を覗いて歩
いた。どこでも値のいいものは、よそゆ
きの別嬪さんであつた。私はなぜか不意
に、太い大根足や赤いほっぺが無性に恋
しくなつた。

連載④

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

「教団分裂と浄土教」

三十五歳で開悟した釈尊は、その悟った真理（仏法）を弘める布教伝道の生活を続けられ、多くの弟子や信者を得、八十歳で入滅されるのでありますが、その間、膨大なお説法

をなされ、滅後それが成文化されて經典になったとするのが、仏教の伝統であります。その中に、阿弥陀仏・お浄土・お念仏などのことを説いた、いわゆる浄土經典があるわけですが、浄土經典のような大乘仏教（後に説明）の經典は、釈尊の直説ではなく、後人が作製





したものだとする説があつて、これがいわゆる「大乘經典非仏説」というものであります。

これはすでにインドや中国でも一部に言われてきたものでして、日本では江戸中期に富永仲基なかもとという人が騒ぎ立て、後に平田篤胤などが仏教を攻撃する好材料となりました。

しかし、お経というものは、釈尊の説法を基にして、それが後に記録化され成文化されたものであることは、仏教の常識でありまして、格別取り立てて騒ぐほどのことでもないであります。經典成立の過程について、法然上人は次のようにご教示しておられます。

阿難・目連等あなん もくれんのもろもろの大弟子等、悲

泣の涙を抑えて相議していわく（中略）

われら世尊に問い奉るに、答え給えるこ

ともあり、あるいは釈尊自ら告げ給うこともありき。濟度利生の方便、今は誰に向かいて問い奉るべき。すべからく如来の御言葉を記しおきて、未来にも伝え、御形見ともせん、と言いて、多羅葉たらようを拾いて、ことごとく是これを記しおきしを、三藏たちこれを訳して唐土に弘め、本朝に伝え給う。（『三部經釈』）

多羅葉というのは、貝多羅葉ばいといいまして、ターラという樹の葉であり、古代インドではこれを紙の代わりとして、經文を刻んだのです。つまりここで法然上人は、經典は釈尊時代に記録・成文化されたものではなく、滅後に弟子たちが記録・成文化したものだといっておられるのであります。

ただ仏教史の世界からいえば、その記録・成文化するための編集会議というものが、幾回もあつたそうでありまして、これを結集けつじゅうというのですが、とにかくこのようにして、經典は釈尊滅後に記録・成文化されたわけでありますが、そういった伝統の中に念仏思想が徐々に芽を出していったのは事実でありまして、学者の中には「浄土教は異教が混入してできたもの」とする人もおられますが、宇井伯寿博士のような立派な仏教学者は、「浄土教は立派に仏教本来のものである」と明言しておられるのであります（宇井伯寿『經典の成立とその伝統』）。

浄土經典が、今日見られるような完全な形に成立した時期については、いろいろな学説

がありますが、私はそれよりも、釈尊滅後の仏教教団の変革の中に、念仏思想漏出の事実があることのほうを重視したいのであります。次のような話です。

釈尊滅後百年くらいして、教団が保守派の上座部じょうざぶと、革新派の大衆部だいしゅうとに分裂します。いつの世でも、如何なる世界でも、こういった分裂はあるものなのですが、この分裂にはもちろん、動機・原因というものがありません。それは「大天だいてんの五事ごじ」と「十事じゅうじの非法ひほう」などと呼ばれている事件でありまして、まず大天の五事のほうから述べますと、次のとおりです。

釈尊滅後百年くらいたった頃の仏教教団に、大天（梵名マハーデーバマカダイバ）へ摩訶提婆マカダイバという

僧がおりました。この人は大変な罪惡の過去をもった人でして、義母と通じ実父を殺害して他地へ逃げ、その事情を知っていた僧をも殺す、という大罪を犯した人です。のち懺悔して仏門に入り、なかなかの学僧となって阿育王の帰依を受けるほどになったのでした。

大天は深く仏教を学んでみて、ともすればそこに聖者ぶった「まやかし」のあることを発見したのでした。そしてそれは、釈尊のご真意でないということを知ったのでした。人間は元来、凡夫であって聖人ではない。どうもがいても凡夫が人間の基本なのである。釈尊の教えは、その凡夫のところから出発するのである。聖人のところから出発するのではない。凡夫というぎりぎりのリアリズム、それ

を忘れては、仏教は無意味なものとなってしまふ。大天はこのような重大なことに気付いたのであります。そしてそのような立場から仏教、すなわち釈尊の教えを再認識することをはじめたのでした。

その結果大天は、仏教から「まやかし」の垢を取り除くことこそ急務であると感じて、次のような五つの意見を主張したのであります。まず①悟りを開いた人であっても、生身の体があるうちは無智の要素がある。②悟った人でも夢精することがある。③悟った人でも世間事では迷いや疑心をもつ。④悟った人でも自分のことは気付かずにいることがある。⑤悟った人でも過去の罪を苦痛に感じ、その感じ取りがなければ悟りはない。

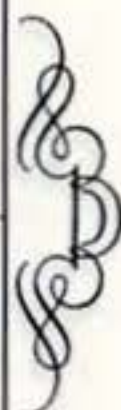
このような五つの主張です。これを「大天の五事」と呼ぶのであります。

さあ、大変なことになります。これまで聖者ぶって来た僧たちにとって、この大天の主張はとんでもないことで、とても認めることはできません。しかし、認めようと認めまいと、これらは現実のすがた、それこそそのものずばりのリアリズムなのですから、誰も心底では否定できるものでありませんでした。そのため大天のこの五事に共鳴する人が多く出、阿育王などもこれを支持したというのであります。

ここで教団は、大天の主張に賛同する派と、賛同しない派とに分かれてしまったのであります。そして、さらに分裂を決定的にしたも

のに、「十事の非法」という事件があつたのでした。これは跋闍子ばつじやし（梵名バツジプッタカ）という僧が、教団の戒律について十の主張をしたもので、次のとおりでした。①塩の貯蔵を許す。②午後の食事を許す。③食事の規制を緩和する。④同一地で懺悔会を別々に行なう。⑤会議のやり方を合理化する。⑥律文より前例を重んじる。⑦食後の飲み物を許す。⑧未発酵の酒を飲むことを許す。⑨へりのない坐具を許す。⑩金銀の貯蓄を許す。

これももちろん大問題になりました。今の私たちから見れば当たり前の主張ばかりです。金銀の蓄えなども欲張って蓄財するというのはなしに、最低の生活を保持するための資



ですから、当然のことなのです。しかし、長老といわれるような保守派の僧たちは、カンカンに怒り、絶対に認めるわけにはいかんと言い出しました。そこで七百人の僧が集まって聖典を研究し直し（第二結集という）、右の十事を検討したのですが、長老たちはこれを「非法」と決めたのです。それで「十事の非法」と呼ばれているわけがあります。しかし、これに賛成の僧もありましたから、前の「大天の五事」と、この「十事の非法」とが動機原因となって、教団は大きく保守派と革新派とに分裂してしまったのであります。

この分裂は大変に深刻なもので、保守派を上座部といい、革新派を大衆部というわけだ

すが、これが小乗仏教と大乘仏教との流れにまでなっていき、「根本分裂」と呼んでいるのであります。

私たちが信仰している日本の仏教は、大乘仏教といわれる流れであることは高校生でも知っておりますが、この大乘仏教というものが出てくるきっかけは、実にこの「大天の五事」と「十事の非法」とにあった。この二大事件を見ますと、すべて凡夫肯定というリアリズムから出て来ているわけでありまして、ここにもう浄土教の核がハッキリとしてきている、お念仏という他力信仰が明瞭なものと なってきているのであります。

（函館・稱名寺住職）

乱れている日本語

利根川 裕

日本語が変わってきている。日々変わりつつある、といつていいくらい、変わってきている。

この変わりを、乱れ、とみる人もいる一方、それだけ日本語がいきいきと動いているのだ、とみる人もある。

もともと言葉は、二面性をもっている。言葉はそれぞれの国、あるいは、それぞれの民族の伝統的な生体系が生みだしたものであるから、

容易に変えうるものではない。ひとつのままとった生体系は、それに応じて、ひとつのままとった言語体系をもっている。そして、いったん成立した言語体系に洗練を加えてゆくことによつて、美しくて、力強くて、しかも正確な表現が作りあげられてゆく。言語は、無限といつていいくらいの、そういう伝統的蓄積のうえに成り立っている。

言葉は、まことに分厚い伝統を背負っている。この伝統性に力点をおいて考えるなら、さいきんの日本語は乱れている。日増しに乱れが進んでいる。

が一面、言葉は生活の変化に応じて、変わってゆくのも事実である。時代とともに死語が生まれ、そしてこれまでになかった言語が誕生してくる。

『広辞苑』は版を改めるたびに、かなりの数の言葉を死語として削りとり、その数以上の新しい言葉を取りあげる。

言葉は生きている。生きものである。だから、言葉に新陳代謝があるのは当然の成りゆきである。

といったうえで、いまの日本語の変わりようを、わたしは乱れと受けとめている。

どこが乱れなのか。また、なぜ乱れたのか。

難しく考えるなら、際限もない文化論となるから、それはいったん括弧に入れることにして、現象論として気のつくことをあげてみる。となると、テレビやラジオが乱れの大きな因子となっているといわざるをえない。

一つは、言葉というものを特別意識したこともないし、また言葉の使いかたに自覚を持ったこともない人が、テレビやラジオに数多く進出してきたことである。当然そこでは、言葉の誤用がある。語法の間違ひがある。そしてそれが、あまりに多量に放映放送されて伝播し普及してゆくものだから、人びとはいつの間にか、伝統的に正しい用語、語法というものにこだわらなくなっていた。

さらには、正しい用語、語法に外れた表現のしかたに、型にはまらない日常的な生命感がある、と受けとられるようになった、ということ

もある。

そしてさらに、いわゆるタレントという人たちの中には、あえて用語や語法を狂わせることによって、自分の表現を目立たせたいとするものもある。そしてこれが、テレビやラジオという、きわめて公共性の高いマスコミ媒体に乗って一般化されてゆくことによって、正しい用語や語法を用いる言語表現は、むしろ、古くさくて、気がきかなくて、型にはまっていて、実感的でない、というふうに受けとられる傾向が生まれたのである。

二つには、学生言葉、若者言葉、芸能人言葉、業界言葉といった、もともとは閉じられたその社会の中でだけ通用している言葉が、テレビやラジオに乗ることによって公共的な一般性をもってきたことである。

これらの言葉は、本来は仲間のあいだだけで

通用する符牒のようなものである。若者たちに若者言葉があるのは、いっこうに構わない。彼らはあえてそういう言葉を使いながら、たがいの青春を確認し合うことであろう。また、そうすることによって一般社会人とは違った自分たちの生命を自覚することでもであろう。それはそれでいい。しかし、若者言葉はそのまま世間一般の言葉として通用するものではない。

かつては、若者もそれを承知していたから、世間一般の社会人に対しては、若者言葉をそのまま用いようとはしなかった。

以下、芸能人言葉、業界言葉等々、事情はおなじである。芸能人仲間だけの言葉がある。業界人の間だけで通用する言葉がある。

やくざ言葉がそのまま一般人の言葉とならないように、芸能人言葉はそのまま一般人の言葉にはならないはずであった。

が現在、テレビでは若者言葉、芸能人言葉、業界言葉が、なんのためらいもなく罷り通っている。それらの言葉を使うのを売りにしている番組もある。

かくして、一部社会だけのものであった閉鎖的言語が、たいへん公共的伝播力の大きいテレビに乗って、わがもの顔に天下を闊歩し、その結果として、本来の日本語でない日本語が驚くべき勢いで普及していつているのである。これは、日本語の乱れである。どうみても、乱れとしかいいようがない。

さて三番目に、テレビが日本語を変化させていると思われるいくつかの傾向をあげてみる。日本語を話すテンポが、次第に早くなっている。早口になってきている。

アナウンサー出身のあるキャスターは、スピーディにテンポアップした語り口で評判をとっ

ている。もちろんここでは、たんなる早口競争ではないのだから、どんなにテンポをあげても、発声している日本語が正確に伝わっていなければならない。

ところで、正確に伝わるか伝わらないか、ということとは、じつは難しいことである。くだんのキャスターの発声は、かなりスピードアップしても、言語不明瞭にはならない。たしかにその単語は伝達される。が、伝達としてこれが正確かどうかは別問題である。

なるほど、その発声は歯切れよく送られてくる。が、発言している意味内容が正確には伝わってこないとしたら、彼の発言は、たんなる言葉の通過にすぎないことになる。たくさんの言葉が、とどまることなく通りすぎた、というだけでは、言葉が伝わったということにはならない。

各民族、各国民の言語というのは、それが正確かつ快適に伝わるための適度なテンポというものがある。話すときのテンポもまた、言語体系の大きな特性である。早ければいい、という単純なことではない。たんなる記号の羅列なら、早くても事が足りよう。が言語はたんなる記号ではない。ひとつひとつに意味をもっているのが言語である。意味が伝わらなかつたら言語にならない。

日本語はひとつひとつに多くの意味を含んでいる言語である。だからそれを伝達しあうには、ある時間がある。いたずらにテンポアップしたのでは、その意味のもつ豊かなニュアンスがふつとんでしまう。いまや日本人はだんだんに早口になり、早口になるほうがカッコイイとでも思っているようだが、いたずらにテンポアップすることによって、日本語の一語一語がもつ豊

かな意味をどんどん痩せさせてしまっているのではないか。

現代の日本人は、おしやべりになった。饒舌になった。一語一語の意味を痩せさせた日本語を話すから、それを補うには、さらに多くの日本語を用いなければなくなる。そして、前記したように、この補強のために、用語や語法の間違った言葉づかいをし、さらには、不足になったボキャブラリーを補うために、公共用語でない仲間言葉までも援用するに至っているのではないか。

かくして、日本語には余韻がなくなりつつある。余白の言葉というものがある。日本語は、あえて、空白と余白を設けてこそ生きている言葉なのではないか。その感覚をなくしたところにも、日本語の乱れがある。

(テレビ朝日系キヤスター・作家)

特別寄稿

ローラ、助けて

山折哲雄

一

「野性の夜に」というフランス映画をみた。

主人公はまだ若いジャン。映像関係の仕事をしているが、エイズにかかっていて定期的に検診を受けている。二週間前に腕に斑点があらわれ、不安が確実なものになっている。もう一つ、

彼にはバイセクシュアルという秘密がある。

そこに、まだはたち前のローラが登場し、二人はたちまち恋に落ちる。

ジャンはやっとの思いで自分がホモであることを彼女に告げるが、エイズにかかっていることは隠している。夜ごとセーヌの河畔に忍び寄

って、男たちと抱きあうジャン。そしてローラとの激しいセックス。

が、ジャンはついに告白する、自分はエイズ・キャリアだと。「なぜ隠していたの」とつめ寄って泣き叫ぶローラ。そして、ジャンと求めあうようになったもう一人の男・サミー。その三人の関係がもつれあい、のっぴきならない葛藤をひき寄せ、互いに傷つけあう。死の影におびえるジャンは快楽と不安のなかをゆれ、エイズに感染したと思いこむローラは自殺騒ぎを起こすが、ジャンへの執着を断ちきれない。

ジャンの病状は刻一刻とすすみ、病院では、腕にできた斑点を焼く治療がつづく。そして、別れのときがやってくる。

夜が明け、ジャンは車をとばしてポルトガルへ。壮大な大自然が眼前にあらわれる。燃えるような輝きを放って海に墜ちていく太陽。茶褐

色の砂漠の起伏がどこまでもつづく荒れ果てた広がり。その前に茫然とたたずむジャンは、氣をとり直し、ヨーロッパの端からだとローラに電話する。「愛してる、本当に。心の底から……」。だがジャンは、再びローラに会うことがないことを知っている。とぼとぼ街を歩いていく彼の口元に、かすかに言葉が蘇る、——「ローラ、助けて……」。

「ローラ、助けて」のこの叫びは、「野性の夜に」という映画をつくった監督シリル・コラルの叫びでもあったにちがいない。この彗星のようにあらわれた才能は、小説を書いたり作詞作曲までする歌手であったが、エイズ・キャリアでもあったからである。彼は自分の体験を小説にし、それを基に映画をつくったのだ。そのうえ監督・脚本はもとより主演のジャンまで演じ、ついに力尽きて今年の三月、映画での予告

のとおりに三十五歳の若さでこの世を去った。

映画は昨年の秋パリで公開されるや、若者たちに熱狂的に迎えられ、第十八回セザール賞（フランスのアカデミー賞にあたる）を受賞した。

だが無情にも、彼の死はその受賞式の三日前に訪れたのである。

生きることは愛することである——この映画が伝えようとしているメッセージである。とすれば、愛することはまた、エイズによる死という運命を甘受することを意味するのであるうか。しかし、その問いに対して、この映画は必ずしもはっきりした答えをだしてはいないようにみえる。映画の結末に浮上する大自然の風景が喚起するイメージも、心なしかたゆたい、ゆれている。

しかしながら、そのような最後の問いに、いったい誰が答えられるというのであろうか。そ

もそもどのように答えたらよいのか。「ローラ、助けて」のジャンの叫びが、我々一人ひとりのあいだを裂き、空中に舞い上がっていくだけである。

この映画には、むろんジャンやローラや男たちの家族が登場する。たとえばジャンの母がいう、「エイズに感染したことで、本当に人を愛することを知ったのね。」それが彼の胸を打つ。だが、ジャンの心はほとんどその母や父のところに帰っていくことがない。深いところで家族のきずながすでに断ち切れていることを、映画はさりげなく浮き上がらせていく。そのような状況は、ローラの家族の場合もジャンの男・サミーの家族の場合も変わらない。

愛の渇きと快樂への耽溺がぶざまに行き違い、親と子の間に冷たいすきまかぜが忍び寄る。そうした乾いた光景の中で、ジャンはしだいに大

きな影をひろげてくる死の触手に吸いこまれていく。愛することは生きることだ、というメッセージがせりあがってくるのがそのときだ。

僕は生きている。世界は僕の外側にポンと置かれたものじゃない。僕もその中にいる。僕への贈り物なんだ。たぶん僕はエイズで死ぬことになるだろう。でもそれはもう僕の人生じゃない。僕は今、生きている。

ジャンが、そして監督のシリル・コラールが映画の最後の場面で我々に投げかけている言葉である。映画「野性の夜に」がそこで終わるほかはなかったように、シリル・コラールもその自分のメッセージに包まれるようにしてこの世を去っていったのであろうか。

映画の、その最後の場面は、確かに観る者の心をうつ。私の脳裡に刻みこまれたそのイメージは、これからも消え去ることはないだろう。

だが、それにしても「僕は今、生きている」という言葉が本当なのか、それともあの「助けて、ローラ……」の声が本当なのか。

一一

映画「野性の夜に」には、みてきたように神の影は宿ってはいない。神の微笑とは無縁の荒野で、ジャンは「僕は今、生きている」と言っている。生きてはいるけれども、彼を支える根拠はどこにも姿をあらわさない。それだからこそ、彼のローラへの愛は孤独の中でふるえていく。絶望的な淋しさの中での愛だ。そのふるえるような孤独の愛の中から、最後の叫び「ローラ、助けて」がしぼりだされる。

現代を象徴する光景といってよいだろう。無神の時代がついに手にすることになった地上の果実である。だからこそ、「僕は今、生きてい

る」という生の讃歌が哀切な響きをもたつて我々の心をうつ。

そこでは死の慰めといった考えなど、とうの昔に効力を失つてしまっている。それはフランス人ジャンだけの運命ではないであらう。我々とて一皮むけば、そのような荒涼たるジレンマの中に投げだされている。

我々もまた、死の慰めといった人生の見方をすこしずつ、しかも確実に手放してきたのである。往生の慰めといつてもよい。かつてキリスト教徒にとって死の慰めの彼方に天国のイメージが輝いていたように、仏教徒にあつては往生の慰めという回路をとおして、いつでも浄土のイメージが現実の意識の彼方に揺曳ようえいしていた。その死に向かつてのかけがえのない係留点を、我々はどこかに置き忘れてきて久しいのである。

いま私がジャンのように、数カ月後の死を宣

告されたらどうするだろう。そう思うだけで胸騒ぎがして、その先のことは見当もつかない。しかし、それでも「僕は今、生きている」と、思わずいう瞬間があるだろう。そしてひとり闇のなかで覚めているとき、「助けて、——」という心の叫びをあげるにちがいない。

私は以前、あるお医者さんから、こういう話を聞いたことがある。「助からない末期の患者さんに対して、私は三つのことに留意して看取つてあげたい。まず肉体的な苦痛をとめる、その人の過去を回顧してほめる、最後にその病み衰えたからだをさす、——その三つのことをしてあげたい。それというのも、私自身が死を前にして、そのとめる、ほめる、さす、の三つのことをしてほしいからです。」

なるほどと思った。そのお医者さんの言葉が全身に染みとおるように私を浸した。私もそう

したい、そうしてほしいという思いがにわかにつのつたのを覚えている。もつとも肉体的な苦痛を止めるのはそもそもお医者の方領分のこと、私にはそこまですることはできない。お医者の手を借りてそうするしかない。しかし、そうしたいという気持ちに偽りはないのである。

けれどもその三つの最後の治療の渦中にあつても、あの「助けて、ローラ」という叫びがうしろの方から追いかけてくるのではないだろうか。心の内から突然、悲鳴のようなその声が噴出してはこないだろうか。

私はこのところ、死の床で聞くための音楽探しをやっている。最後のときを過ごすための、道づれの音楽を何とかみつけないものと思うあまりの話である。はじめは半ば冗談のつもりであつたが、いつのまにか力が入るようになってしまった。

そんなあるとき、モーツァルトのレクイエムやショパンの葬送の曲を聞いていて、絶望的な気分になった。それは死の慰めになるような音楽とは、とても思えなかったからだ。人間は自分の責任で生きてきたように、死ぬときも自分の責任において一人で死んでいかなければならないという世界が、そこでは音によって表現されていたのである。

それに比べれば、ご詠歌や地蔵和讃の方がまだしも自分の気持ちになじむようだ。同じ悲哀の調べでも、モーツァルトやショパンよりは、ご詠歌や地蔵和讃の哀調の方に死の慰めへの誘いが自然に感じられる。やはり生きている土地になじんだ心の原風景を、それが喚起するからだろうか。

それでは、そのようなご詠歌や地蔵和讃で本当に心を安んじて死んでいけるのかといわれる

と、とたんに自信がなくなってしまう。その土壇場では、レクイエムも和讃も何ら異なるところはないのではないかという悪魔のささやきが聞こえる。そして再び、あの「ローラ、助けて」の叫びが、あいも変わらず追いかけてくるのではないだろうか。「僕は今、生きている」の梨花、助けて」の悲鳴が私の全存在を覆いつくしてしまうのではないか。

「助けて、ローラ」から逃げだすために、いったいどうしたらよいのか。堂々めぐりである。出口を求めている、いつのまにか入口に戻ってきてしまっている。悲劇の出口から喜劇の入口への帰還である。

そのような悲劇と喜劇の堂々めぐりがやってきたとき、われわれの前に待っているのは単なる徒労感だけなのだろうか。おそらくそれだけ

ではあるまい。というのもそのとき、私の内部から何かが起こるかもしれないからである。そして、外部からも何か近づいてくるかもしれないからである。内部から起こってくるものと外部から近づいてくるものが、ひよつとすると私の眼前で手を結ぶかもしれない。

あるいはその内部からの力と外部からの力は、手を結ぶほど接近することはないのかもしれない。その二つの力が向こう側とこちら側に隔てられたままという状態もあるだろう。ただ、その二つの柱の間に虹のような橋がかかるときが来ないとも限らない。美しいイメージの虹がかかって、最後のときを柔かく押し包んでくれるかもしれない。

スキージャンパーは滑降のスタートをきる直前、自分のからだを空中にどのようなシュプールを描いて舞いあがり、そして着地するかを

脳裡に叩きこんでから踏みだすという。離陸から着陸までの全コースを、事前にイメージの中に再現してから、跳ぶ。そのイメージトレーニングに成功するときジャンプはうまくいき、それに失敗するとき予想外の着地に終わるのだという。

同じようなことを指揮者の岩城宏之さんから聞いたことがある。オーケストラを指揮しているとき、指揮者は眼前の宙空にスコアを開き、頁を繰っているのだという。おそらく指揮台の上のスコアよりも空中に浮かぶスコアの方が間違いのない、確実な導きのテキストになっているのにちがいない。

死を眼前にした人間にとっても、同じようなことがいえるのではないだろうか。死のバリヤーを越えて、その向こう側に跳躍しようとするとき、自分自身の身体がどのようなシユプール

を描いて飛びだしていくのか。その形を果たして美しい虹のようにイメージすることができるとのかどうか。巧みな指揮者のタクトによってシユフォニーが無事に終結に向かうときのように、死に至るためのスコアが誤りなく導きの糸でありつづけることができるのかどうか。

もつとも、我々がその最後のときに着地するのは、この世ではない。その点でスキージャンプやオーケストラの演奏と死への跳躍は決定的に違う。しかしながら、イメージの中での着地という面に光をあてて考えれば、その両者の間に本質的に違いはないのではないだろうか。

その最終的に着地するゴールを、魂の終着点と呼ぼうが、それとも「浄土」と呼ぼうが、それは我々がそのときに自分自身に問いかけてみるほかはない事柄なのである。

(国際日本文化研究センター教授)

● 今月の随想で「キーストンの死」を書いてくれた原田純一氏は長く報知新聞社の競馬記者をした人である。その後「競馬報知」に移り、現在も第一線で活躍中であり、時折、NHKで大レースの予想や解説も試みたりする。私とは旧知の間柄で、府中の競馬場に近い私のところに泊まったりもするが、いつも感心するのは、朝の早い馬の調教日には、家人がまだ眠っている午前四時頃にもう出かけて行く。彼にとって忘れ得ぬ馬がいたらぜひ書いてほしいし、生きとし生けるものの死はそれなりの感動を伴うはずだから、という私のすすめに快く応じてくれたのがこの一文である。

● 近頃は夫と同じ墓に入りたがらない妻がふえているそうである。噂ばかりかと思つて心当たりの寺院に訊ねたら、確かに近年はそうした風潮になつていくという答えが返ってきた。「自然に還る死」の中で大角修氏はそんな歎かわしい世相に対し、——夫あるいは妻とともに眠りたいと思えるような人生をつくるのが幸せというものではないだろうか——と、きわめて明快に記された。我慢を忘れ、協調をないがしろにし、求めることばかりが多くなつてきた現代人に対する、平凡ながら味

のある提言として受けとめたいものである。

● 本誌に「旅」を連載中の夏氏と一夕を共にして歓を尽くした。都内のほか、函館にも仕事部屋を構える夏氏の北海道に寄せる愛情はことのほか深い。それかあらぬか今月号は馬鈴薯の話が登場した。旅の記事に独特のスタイルを生もうとする夏氏の今後をぜひ見守つてほしいと思う。

● 巻末の特別寄稿「ローラ、助けて」は山折哲雄氏で、氏は梅原猛氏が所長をつとめる国際日本文化センターの教授である。過去に『日本人の靈魂観』や『死の民俗学』などの著書があるこの思想史、宗教学者は時代の要請もあつて超多忙に過ぎしておられる。寸暇をさいてのご執筆に対し、改めて厚くお礼を申しあげたいと思う。

(編集チーフ・小川有順)

● お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一〇部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。領価その他について詳しくご説明申しあげます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

● お詫び

去る四月に法然上人鑽仰会と浄土宗浄業会が合併して、新法然上人鑽仰会が再組織され、現代のニーズに相応した信仰運動が展開されることとなりました。その後数カ月を経過しましたが、旧事務所大道社から新事務所明照会館への移転をはじめ、新会則による会員各位の移行手続き、それに伴う会費精算等に思わぬ時間がかかり、併せて、本会の中核をなす『浄土』誌の刊行が、四月特別増大号以降遅延をいたし、会員読者各位には大変ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。ようやく見通しがつき、準備期間として五・六月を合併にさせていただき、今後もしばらく毎月発行予定が遅れますが、事情ご賢察の上今しばらくご理解の程よろしくお願い申し上げます。(編集人・宮林昭彦)

浄土 五十九巻 十月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成五年九月二十五日

発行——平成五年十月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——株式会社文化カラー印刷

写真植字——文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

結局、 黒ラベル。



いつでも・どこでも・誰とでも……
楽しく飲める〈黒ラベル〉。

サッポロ〈生〉黒ラベル

人間のやさしさをクルマに。

浄土 第五十九巻 第十号 (毎月一回一日発行)

平成五年十月一日発行 昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

すっきりが、いい。

新しいローレルと、日本。



頒価五百円

Photo:ローレル25ツインカムメダリスト(オプション装着車)



松方は、**◎**りゃあいいと思った。

◎本木は、**◎**なるほどと感心した。

◎方・**◎**木の**◎**ローレル評判記。LAUREL誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル25ツインカムメダリスト.....全長4710mm全幅1720mm全高1380mm/主な装備●RB25DE(6気筒ツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オプションセーフフルオートエアコン●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とは異なる条件下で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823.....お近くのローレル販売会社へ